3 墓地と地域性

山田 慎也
YAMADA Shinya
国立歴史民俗博物館 / 研究部 / 民俗研究系 / 教授

さまざまな文化や風習が残る日本において、地域による墓地の形や墓での行事にも違いはあるのだろうか。日本各地の墓地の姿を俯瞰し、特徴的な違いを持つ墓地の姿について取り上げ、それらが生まれた背景とともに紹介する。

墓地のイメージ

私たちが持つ墓地のイメージは、寺院墓地のように大小さまざまな石塔が数多く建っていたり、公園墓地のように整備された区画に類似の形態の石塔が並んでいたりする光景なのではないだろうか。現在の多くの墓は、墓石の下にカロートという納骨室を設置しており、火葬骨を追葬できる点に特徴がある。

この形式が普及していったのは昭和初期以降であり、墓地の集約化や無縁化対策として生み出された都市的な様式であった[1]。この形式が現在では全国的に広まっているが、それでも多様な墓のあり方をまだみることができ、その関わり方もさまざまである。ここでは地域の墓をめぐる多彩な姿をいくつか取り上げていきたい。

両墓制と無墓制

近畿地方から中国、四国、中部、関東地方まで点在している、いわゆる「両墓制」と民俗学で称してきた墓制がある。通常、遺体や遺骨を埋葬（埋蔵）した所に石塔を建てるが、両墓制は遺体を埋葬するサンマイ（三昧）などと呼ばれる区画と、石塔を建てる区画が全く別の場所になっている墓制である（写真1、2）。

例えば、滋賀県東近江市五個荘（ごかしょう）町小幡（ちょう）では、遺体を埋葬するサンマイは、この地区を含む周辺6地区と共同のもので地区ごとに区画されている。区画内では、空いている場所であればどこでも埋葬してかまわず、家ごとの区分はない。そして木製墓標と河原の石を置くだけで石塔は建立しない。

小幡地区には地区内に臨済宗、浄土宗、浄土真宗の寺院があり、住民はいずれかの寺院を菩提寺とし、その境内に石塔を建立している。墓参は菩提寺の石塔とサンマイそれぞれにするという。ただし近年は公営火葬場が設置され、土葬が行われなくなると、菩提寺の石塔に納骨されるように変わってきているという[2]。

一方で、火葬となってもサンマイに火葬骨を埋めている近江八幡市加茂町の事例などもあり、それぞれの地域によって対応は異なっている[3]。

しかし、このような石塔を必要としない「無墓制」もあった。まだ公営火葬場が発達する前には、野焼きをして遺骨の一部を収骨し本願寺などの本山納骨をすると、それ以外はその場に放置された。特に墓を作らない地域が、山口県大島郡周防大島町笠佐島のほか[4]、福井県や滋賀県などいろいろな地域にあった（写真3）。その日常の祭祀は仏壇や寺院となっている。このように、日本の墓制は、かならずしも遺体が長く尊重されてきたわけではなかったのである。

写真3　野焼きの火葬場（滋賀県近江八幡市）。現在は使用されていないが、この地区も特に石塔は建立されなかった

納骨堂の流行

近代化が進み、特に戦後全国で重油やガスによる火葬場が設置されていくと、土葬地域でも火葬が浸透し、現在では99.9%という世界有数の火葬国となった。こうしたなかで、カロート式の墓は全国的に広がっていくとともに、地域によっては納骨堂が発達する。厚生労働省の『衛生行政報告例』によれば、納骨堂の多い都道府県は、昭和35年は北海道、福岡、福井の順であったが、昭和45年になると福岡、北海道、熊本になり、北海道とともに九州地方で納骨堂が発達している[5]。

北海道において戦前期から納骨堂がある程度存在するのは、明治以降開拓が進む中で墓地も作られているが、人々が移動する可能性もあり、墓を作らず寺院に遺骨を預けていく場合も多かったからである。その本堂の周囲に棚を設けたことが、納骨堂のはじまりとなった。

一方、九州、特に福岡県では、都市部だけではなく村落部においても土葬の共同墓地を改葬し、納骨堂にしていった地域が多い。寺院納骨堂もあるが、他の地方と比較して珍しいのは集落の共同納骨堂が多いことである。納骨堂の多くは仏壇式となっており、上段に位牌や過去帳、下段が納骨スペースであり、完全に墓地の代替となっている（写真4）。

写真1　両墓制のサンマイ（滋賀県近江八幡市）

写真2　両墓制の石塔墓（滋賀県近江八幡市）

写真4　集落の共同納骨堂（福岡県糸島市）

写真5　半野外の納骨堂（鹿児島県鹿児島市）

鹿児島県では室内型の納骨堂よりも、壁面式の半野外の納骨堂が発達している（写真5）。アパート式の墓といってよく、生花や線香などを一般の墓と同じように供えることができる。桜島から火山灰が日常的に降ってくることで、屋根を付けているところも多いが、このような納骨堂は屋根を兼ねたものとなっている。いずれも土葬墓地の改葬によって作られていったのである。

写真6　門中墓（沖縄県糸満市）

沖縄の墓

沖縄ではもともと珊瑚礁の洞窟などに棺を置いて風葬をしていたが、中国の風水思想とともに造墓技術が入ってきたことで、建物の屋根の形をした破風墓や、亀の甲羅の形をした亀甲墓など巨大な墓が作られてきた。沖縄では門中（もんちゅう）という父系をたどってつながる親族組織が発達し、その人々が一緒に入る門中墓は南部で主に作られている（写真6）。

また沖縄の葬制は、洗骨改葬が行われてきた。墓の入口はシルヒラシといって遺体の骨化を待つ空間があり、ある期間を過ぎると取り出して骨を洗う。そして、改めて厨子瓶などに納め、墓の奥に合葬するため、大きな空間の墓が必要であった[6]。

しかし近年は、門中ではなく家族墓も多く用いられるようになってきたが、それでも本土の墓に比べると格段に大きい。ただし、火葬の普及によって洗骨はあまり行われなくなってきた。

無縁や土神

新潟県の佐渡では、先祖の墓と無縁の墓の二つの石塔を建てることがある（写真7）。この地域の無縁とは、

写真7　先祖の墓と無縁の墓（新潟県佐渡市）

写真8　石塔脇にある土神の碑（長崎県長崎市）

写真9　墓に付けられた盆飾り（秋田県由利本荘市）

写真10　巳正月の墓（愛媛県西予市）

一般にいうところの祀り手のない仏、つまり絶家して祭祀をする子孫のない死者のことではない。佐渡では、家の死者は大きく二つに分けて考えられてきた。先祖とは家の当主夫婦であった人々であり、無縁とは夭折の子どもや結婚せずに亡くなった人など、縁づかずに亡くなった人をいうのである。それぞれの家に先祖と無縁がいるのであり、そのために二つの石塔が建てられるのである[7]。

また、長崎県では墓地の脇に土神（どじん）と彫った小型の石碑を建てる（写真8）。これは中国の風水思想の影響を受け、墓の土地の神を祀っているものである。長崎は近世期には中国貿易の拠点として唐人屋敷があり、江戸時代以降、中国文化の影響を受けて、それが一般にも広がったものと考えられる。

ちなみに、長野県や岡山県などさまざまな地域で、ジドリ（地取り）やジカイセン（地買い銭）といって、かつてはお金を四隅において、場所決めをしてから墓穴を掘ったというところも多く、これも古代の中国の風水思想の影響が民俗として残っているものと考えられる[8]。

墓での行事

墓地は、さまざまな行事を行う場でもある。長崎県ではお盆になると墓に枠を組んで提灯をたくさん掲げ、盆の期間中毎晩明かりを点してお参りし、花火や爆竹を鳴らして先祖を祀る。

また秋田県では、お盆になると仏壇と同じように、墓にも飾り付けをする。笹やすすきを立て、トウロウと呼ぶ色鮮やかな最中皮の飾りやささげ、ハマナスの実、ひょうたんなどをさげて、前に棚を作って果物や野菜、菓子、赤飯などを供えておく。（写真9）

また正月に関しても、香川県から愛媛県にかけた地域では、新たに亡くなった人がいると、その年の12月の巳の日の前後に、巳正月（みしょうがつ）という行事を行う。墓には松飾りを用意するが、通常の正月とはあえて異なる作り方の松飾りをつける（写真10）。そして墓参りを行い、鏡餅を後ろ手にもって、鎌で切って火にあぶって親族一同が食べる。これは、新仏だけの特別行事なのである。

このように、日本各地でカロート式の墓地が浸透する一方で、地域の風俗・風習により多様な形式の墓地やそれに関連する行事が残っているのである。

＜参考文献＞

1）問芝志保　2018「関東大震災と家族納骨墓－近代都市東京の墓制」『宗教研究』393
2）岩田重則　2018『火葬と両墓制の仏教民俗学－サンマイのフィールドから』勉誠出版
3）岩田前掲書
4）児玉識　1976「真宗地帯の風習－「渡り」の宗教生活を探る」『日本宗教の歴史と民俗』隆文館
5）山田慎也　2018「納骨堂の成立とその集合的性格」『現代日本の葬送と墓制－イエ亡き時代の死者のゆくえ』吉川弘文館
6）名嘉真宜勝・恵原義盛　1979『沖縄・奄美の葬送・墓制』明玄書房
7）山田慎也　2007『現代日本の死と葬儀－葬祭業の展開と死生観の変容』東京大学出版会
8）五来重　1992『葬と供養』東方出版